

チッソ

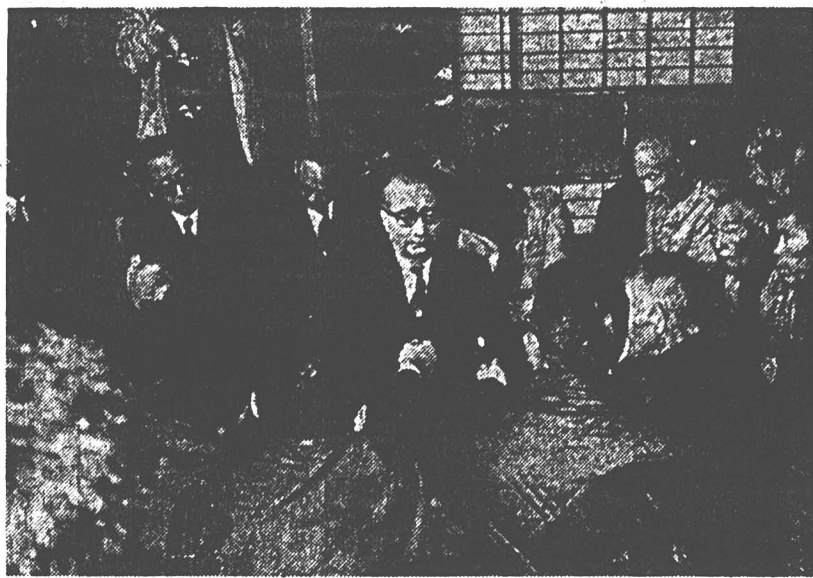
イメージチェンジ作戦

PRマンも同行

島田社長を陣頭に

患者側には一部反発も

【本報企業・チッソ】のイメージチェンジ作戦が続いている。ことし夏、社長に就任した同社の島田賢二社長（右）は十三日から三日間、水俣市に滞在し、水俣市民や水俣病療養者と会って話を聞くと、精神的に動き回った。



訴訟派患者と話し合う島田社長

この接触の中で、同社長は幕始で、かなり前向きな姿勢がうかがえる。笑顔を絶やさず、市に文化センター建設費の寄付を申し出て致前のいいところを見せるなど、落着いた同社のイメージをすくすくもアップしようと必死、同社の幹部がこれほど積極的に、水俣市民との接触合いを求めたのは初めて

に接する態度が悪いと思われたら、減額なく返って下さい」と言い、患者側から逆に「患者である子供のことを思えばチッソが安定していかないと思う。がんばれ」と励まされる一幕もあった。

とで、患者と会社対立するようになり、市に文化センター建設費の寄付を申し出て致前のいいところを見せるなど、落着いた同社のイメージをすくすくもアップしようと必死、同社の幹部がこれほど積極的に、水俣市民との接触合いを求めたのは初めて

チッソの企業イメージは全国的には水俣病、県内ではそれに加えて労使の激しい対立などで象徴されているようだ。しかし訴訟派との会合の中で同社長は「社の悪いことは全部私の責任です。つまりま

しかし半面、今回の訪問で患者側が驚きおぼろげにしたのは「水俣を閉める市民連絡協議会」の結成市民大会に社長が出席したことで、市に文化センターと授産・取

野施設のために三億九千百万円を
寄付すると約束したこと。訴訟派
患者との話し合いの席上、社長は
「そっくりいっぺんに寄付するな
ど今のところ会社はそんなにもち
かっていません。二十数年間にわ
たって起債分を払い続けるという
方法です」と弁解していたものの、
患者側に見れば「なんで今時

そんな寄付なんか言い出さなけれ
ばならないのか。明るくするのな
ら水俣病の足元からく明るしてく
れ」と怒っていた。ちよっぴり東
京からの「演出」が地元の事情を
十分くみ上げていないことを現わ
した。
また今回の会合などがかなりオ
ーブンに行なわれたことも一つの

特徴。患者などの会合はこれまで
公開されなかった例が多かった
が、浦水中のフリーのカメラマン
ユージン・スミス氏などとも社長
が直接名刺を交換する場面なども
あり、水俣市民の間では「チツソ
は変わった」という声が出たのも
事実。

こうしたイメージチェンジの動

きは追いつめられた同社の起死回
生の浮上作戦とみられ、東京の有
名広告代理店のPRマン二人も社
長一行に同行していた。今後、い
ろんな面で同社のキヤンペーンが
開始されるものとみられるが、
「水俣病患者の真の救済以外に同
社のイメージアップはない」とい
う意見も強い。